

小林秀雄著『本居宣長』: 二十七章主題《貞之『古今集・假名序・土佐日記』及び式部『源氏』に於ける、『言靈』の變遷(轉義D1の至大化=合體Eの至大化) : その「關係論」的纏め》
 * 即ち、『言靈の(己を掘み直す)歴史的生態(轉義D1の至大化)』・『いともあやしき言靈(物:場 C')のさだまり(物:場 C')』の發展(轉義D1の至大化=合體Eの至大化)形態。

①言語(物:場 C') ②言靈(物:場 C') ③環境(物:場 C') ⇒ からの關係: ①は②といふ自らの衝動を持ち(D1の至大化)、③に出会ひ(D1)、「④: 自發的にこれに處してゐる[『鋭敏に反應』(轉義:D1の至大化)]」⇒ 「⑤: 姿」(④的概念F) ⇒ E: 事物に當つて、己(①)を驗し、事物に鍛へられて、己の⑤(F)を形成(合體:Eの至大化)してゐるものだ」(③への距離獲得:Eの至大化) ⇒ 宣長(△枠): ①②への適應正常。

關係論: ①『源氏』(物:場 C') ②『古今』(物:場 C') ③わが國の文學史[別稱『言靈』(物:場 C')] ⇒ からの關係: ①が成つたのも、詰まるところは、この同じ方法[即ち『觀念(物:場 C')といふ身輕な己の正體に還つて(即ち、轉義D1の至大化)』]の應用によつたといふところが、⑥を驚かせたのである。「①: ⑥は、②の集成(即ち、轉義D1の至大化)を、③に於ける、」⇒ 「⑤: 自覺とか反省とか批評」(④的概念F) ⇒ E: ⑤とか呼んでいい精神傾向の開始(即ち、合體Eの至大化)と受取つた。その[『⑤と呼んでいい精神傾向の開始』(即ち、合體Eの至大化)の]一番目立つた現れ[即ち『觀念(物:場 C')といふ身輕な己の正體に還つて(即ち、轉義D1の至大化)』]を、和歌から和文への移り行き(即ち、轉義D1の至大化)に見た。この受取り方[『⑤と呼んでいい精神傾向の開始』(即ち、合體Eの至大化)の]正しさを保證するものとして、⑥は①を選んだ。それ[⑤と言ふ『文學史(即ち言靈)の、合體Eの至大化=轉義D1の至大化』の正しさの保證]が、②の『手弱女ぶり』といふ真淵の考へに、⑥が從はなかつた最大の理由だ」(⑤への距離獲得:Eの至大化) ⇒ ⑥宣長(△枠): ①②への適應正常。

(物:場 C')...

①言語(物:場 C') ②言靈(物:場 C') ③環境(物:場 C')

~~~~~  
 ①『源氏』(物:場 C') ②『古今』(物:場 C') ③わが國の文學史[別稱  
 『言靈』(物:場 C')]

からの關係(D1の至大化)

①は②といふ自らの衝動を持ち(D1の至大化)、③に出会ひ(D1)、「④: 自發的にこれに處してゐる[『鋭敏に反應』(轉義:D1の至大化)]」

①が成つたのも、詰まるところは、この同じ方法即ち[『觀念(物:場 C')といふ身輕な己の正體に還つて(即ち、轉義D1の至大化)』]の應用によつたといふところが、⑥を驚かせたのである。「①: ⑥は、②の集成(即ち、轉義D1の至大化)を、③に於ける、」

F(言葉・概念)...

「⑤: 姿」(④的概念F)

~~~~~

「⑤: 自覺とか反省とか批評」(④的概念F)

E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]...「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。

*「事物に當つて、己(①)を驗し、事物に鍛へられて、己の⑤(F)を形成(合體:Eの至大化)してゐるものだ」(③への距離獲得:Eの至大化)。

*「⑤とか呼んでいい精神傾向の開始(即ち、合體Eの至大化)と受取つた。その[『⑤と呼んでいい精神傾向の開始』(即ち、合體Eの至大化)の]一番目立つた現れ[即ち『觀念(物:場 C')といふ身輕な己の正體に還つて(即ち、轉義D1の至大化)』]を、和歌から和文への移り行き(即ち、轉義D1の至大化)に見た。この受取り方[『⑤と呼んでいい精神傾向の開始』(即ち、合體Eの至大化)の]正しさを保證するものとして、⑥は①を選んだ。それ[⑤と言ふ『文學史(即ち言靈)の、合體Eの至大化=轉義D1の至大化』の正しさの保證]が、②の『手弱女ぶり』といふ真淵の考へに、⑥が從はなかつた最大の理由だ」(⑤への距離獲得:Eの至大化)。

(△枠)宣長